



東京学芸大学リポジトリ

Tokyo Gakugei University Repository

生涯学習時代における障害者青年学級の役割：
障害者青年学級参加の本人のニーズ調査から

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2012-06-01 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 寄林,結, 高橋,智 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2309/127941

生涯学習時代における障害者青年学級の役割

—— 障害者青年学級参加の本人のニーズ調査から ——

寄 林 結*・高 橋 智**

特別支援科学講座***

(2011年9月30日受理)

1. はじめに

知的障害者の社会教育の代表的なものとして障害者青年学級がある。障害者青年学級は学校を卒業した知的障害者の貴重な学習の場として、今日に至るまで重要な役割を担ってきた。その多くは市区町村の社会教育行政によって実施されているが、特別支援学校などが卒業生の同窓会活動の一環として実施している場合も少なくない。

障害者青年学級は1964年に東京都墨田区で始まった「すみだ教室」に起源をもつ。「学校という場所を離れると、彼らは学習の場を失うと同時に、みんなと一緒に何かをしたいという精神的な安定の場も失ってしまう。そんな人たちの卒業後の支えとなるべくして生まれたのが、『すみだ教室』である」(小林：2002)というように、「すみだ教室」は学校教育のアフターケアを目的として始まっている。当初は「特殊学級」担任が講師を務めるなど学校教育的な色彩が強かった。

障害者青年学級の取り組みが広がっていくなかで、次第に「教える—教えられる」という関係性が見直されてきた。成人である知的障害者はいつまでも教育の対象ではなく、自ら学ぶ主体であるという認識が広がり、学級を支えるスタッフも講師からボランティアとなり、ボランティアから市民へと変わっていった。それにともない学級生との関わり方も「指導→支援→共に学ぶ」と変化している(表1)。

表1 障害者青年学級の変遷

時代	学校教育	→	社会教育	→	生涯学習
活動の意味	アフターケア	→	社会教育事業	→	本人活動
スタッフの立場	講師	→	ボランティア	→	市民
スタッフのかかわり	指導	→	支援	→	共に学ぶ

(筆者作成)

また長く障害者の社会教育保障の問題に取り組んできた社会教育研究全国集会における障害者分科会の内容からも、障害者青年学級の変遷が伺える(表2)。1990年代前半までの分科会では学習よりも福祉に重点が置かれていた。1993年から分科会テーマが「障害者の生涯にわたる学習保障」となり、障害者の学習保障の問題に焦点が絞られていった。それにともない障害者青年学級に関する議論も多くなる。そうしたなかで障害者の本人参加への意識が高まり、多くの障害者青年学級も本人活動としての色彩が強くなっていった。2006年の分科会では本人分科会も行われている。

* 東京都町田市立町田第四小学校

** 東京学芸大学総合教育科学系特別支援科学講座・連合学校教育学研究科発達支援講座

*** 東京学芸大学(184-8501 小金井市貫井北町4-1-1)

しかしその後、障害者の学習に関する議論は衰え、2009年にはテーマが「障害者と地域」に変わってしまった。2010年も課題別学習会の中で幅広い障害者の問題が取り上げられ、障害者の学習に関する議論を深めることはできなかった。ここに至り、障害者の生涯学習における方向性を見失いかけているともとれるような動向にある。

表2 社会教育研究全国集会の流れ

年	分科会テーマ	要 点
1990	「障害」者のくらしと地域福祉	福祉的な視点が強い
1991	障害者のくらしと社会教育	
1992	くらしを組みかえる福祉・教育	
1993	障害者の生涯にわたる学習保障	・学習保障の問題にテーマが絞られた ・障害者青年学級についての議論も活発に
1994		・文化創造活動の重視 ・自己選択・自己決定について言及
1995		ボランティアの位置づけについて議論
1996		教育的活動と自己表現・自己解放の違いを指摘
1997		本人の主体的な参加や自己決定について言及
1998		知的障害をもつ本人からレポート報告
1999		地域における豊かな学びの創造— 子どもから高齢者まで —
2000	障害者の生涯にわたる学習保障	本人参加の意義を強調
2001		
2002		
2003	障害をもつ人の障害にわたる学習保障— 生涯を持っていきいきと地域で生きる —	
2004	障害をもつ人の生涯にわたる学習保障	本人参加の重要性を再確認 本人分科会開催
2005		
2006		
2007		
2008	障害者の生涯にわたる学習保障	障害者青年学級の議論が停滞
2009	障害者と地域	学習保障の問題からテーマが逸れてしまった
2010	「貧困」問題に向き合い、新たな福祉と社会教育のつながりを創る	「高齢者」「障害者」「健康」の総括集会

(筆者作成)

さて1974年に開始された東京都町田市の障害者青年学級は、知的障害者の社会教育において先駆的な取り組みをしてきた。上述の社会教育研究全国集会でも、本人や職員・支援者などによってたびたび実践報告がされている。柴田(1993)によると、町田市障害者青年学級では、①自治的な集団、②文化的創造活動、③生活という主題の三つを実践の柱に据えており、その成果として「一人一人の学級生の人格的な広がりや深まり」を挙げている。

三つの実践の柱のうち、②文化的創造活動の代表的なものとして、青年学級オリジナルソング(以下、「学級ソング」とする)がある。はじめは話し合い活動の中で語られた思いを既成のメロディーにのせて歌っていたのだが、活動が発展していくなかで、詞も曲もオリジナルの学級ソングがたくさん誕生していった。学級ソングの一つである「ともだちのうた」は、『「ともだちって何だろう』という話し合いからでた意見をつなぎ合わせて一つの歌に仕上げたもの』である。また「僕らの輝き」は「一人ひとりのすばらしいところ、一番輝いているところを出し合ってきた」(津田・大石:2004)。1988年からは2年に一度、市民ホールで「若葉と

そよ風のハーモニーコンサート（通称「わかそよ」）を開催し、学級ソングを地域に向けて発表している。

近年は本人活動としての認識が一段と強まり、2004年に発展学級として「とびたつ会」が誕生した。「とびたつ会」は「町田にようやく生まれた本人活動の会」である（柴田：2004，松田：2008）。上述の「わかそよ」の運営にも「とびたつ会」は実行委員として中心にかかわっている。

しかし現在、町田市障害者青年学級は学級生の高齢化や活動のマンネリ化、人数の増加などの課題を抱えている。こうした課題は多くの障害者青年学級に共通するものである。

一方、近年盛んになってきている障害者の生涯学習実践としてオープンカレッジがある。今枝ら（2010）は知的障害者の成人期における生涯学習支援に関する論文のレビューを行い、1990年代から2000年代にかけて論文数が増加していること、その理由を「オープンカレッジの実践が広がったことと関係」していると分析している。

生涯学習時代と叫ばれる今日、障害者を取り巻く状況も障害者青年学級ができた当時とは随分変わった。オープンカレッジの実践の広がりに見られるように知的障害者の学習機会は増え、障害者青年学級が唯一の学びの場ではなくなっている。そうしたなか、障害者青年学級の意義や役割をあらためて問い直していく必要がある。

それゆえに本研究では、障害者青年学級に参加している本人・当事者への障害者青年学級に関するニーズ調査を通して、本人・当事者の視点から障害者青年学級の意義・役割を検討することを目的とする。

2. 研究の方法

（1）調査対象

調査対象は、調査の協力を得られた、東京都内A市およびB市の障害者青年学級（双方とも市の社会教育行政によって運営されている）に参加している本人・当事者である。なおA市障害者青年学級の発展学級として本人・当事者、支援者によって自主的に運営されている本人の会「とびたつ会」参加者も対象に含めた。

（2）調査内容

調査内容は、①本人の属性、②障害者青年学級に関する項目（学級歴、青年学級参加のきっかけ、青年学級の思い出、青年学級参加による変化や成長、青年学級の仲間への思い、これからやってみたい活動、生活や仕事へのつながり等）である。

（3）調査方法

調査協力を得られた本人・当事者の自宅や作業所、障害者青年学級などで1対1での面接法調査を実施した。面接は半構造化面接法の形をとった。面接の内容は本人の理解を得てボイスレコーダーやメモに記録し、内容分析を行った。

（4）調査期間

2010年11月～2011年1月。

3. 本人のニーズ調査の結果

3. 1 調査対象者の概要

対象者	年齢	性別	在籍学級	手帳	程度	就労形態	暮らし
A	58	女性	B市	愛の手帳	不明	不明	兄の家族と同居
B	24	男性	B市	愛の手帳	不明	福祉就労	家族と同居
C	64	女性	A市	愛の手帳	3度	福祉就労	グループホーム
D	42	男性	A市	愛の手帳	3度	福祉就労	家族と同居
E	不明	女性	A市	愛の手帳	3度	福祉就労	家族と同居
F	38	男性	B市	愛の手帳	不明	福祉就労	姉の家族と同居
G	不明	女性	B市	愛の手帳	不明	福祉就労	寮

H	20	女性	B市	愛の手帳	不明	福祉就労	家族と同居
I	25	女性	B市	愛の手帳	不明	福祉就労	寮
J	37	女性	B市	愛の手帳	不明	福祉就労	家族と同居
K	46	男性	A市	愛の手帳	4度	一般就労	通勤寮
L	44	女性	B市	愛の手帳	不明	福祉就労	寮
M	26	女性	B市	愛の手帳	不明	福祉就労	家族と同居
N	20	女性	B市	愛の手帳	不明	福祉就労	家族と同居
O	20	男性	B市	愛の手帳	不明	福祉就労	不明
P	35	男性	と	愛の手帳	3度	福祉就労	家族と同居
Q	不明	男性	A市+と	愛の手帳	不明	福祉就労	福祉ホーム
R	26	男性	B市	愛の手帳	不明	福祉就労	家族と同居
S	38	男性	A市	愛の手帳	不明	福祉就労	不明
T	34	男性	と	愛の手帳	4度	福祉就労	母親と同居
U	33	男性	A市	愛の手帳	不明	福祉就労	家族と同居
V	38	女性	A市	愛の手帳 身体障害者手帳	4度 6級	福祉就労	家族と同居
W	59	男性	と	愛の手帳	4度	福祉就労	兄嫁と同居

※と：とびたつ会

3. 2 Aさん

58歳女性。B市の障害者青年学級には開設当時から通い続けている。現在は兄の家族と同居。

- ①学級歴：開級当初から約35年。
- ②青年学級参加のきっかけ：中学校時代の先輩でもある友人に紹介してもらって入ったと話した。
- ③青年学級の思い出：一番の思い出を尋ねるとすぐに修学旅行と答えた。修学旅行でカラオケをしたことが特に印象に残っているそうである。カラオケで歌う曲は“高校三年生”と話した。
- ④参加による変化や成長：最初は質問がわかりにくかったのか「あんまりないけど…」と不安そうな表情であった。調査者が「友達が増えたとか」と例を挙げると、「そうですね、友達とか」と肯定した。また講師や支援者に勧められて歌を歌うようになったということを嬉しそうに話した。歌は昔から好きだったのだが、苦手意識があったそうである。今は学級でのカラオケを楽しみにするほど歌うことが好きなようであった。
- ⑤青年学級の仲間と職場の仲間との違い：質問の内容がわかりにくかったのか「別にないけど…」と不安そうな表情であった。職場に別の市の青年学級に通っている人がいて、青年学級の話をするところがあると話していた。職場の仲間とも青年学級の仲間とも、同じように仲良くしているそうである。
- ⑥友達への思い：Aさんと同じように長く学級を続けている支援者の名前を挙げ、「いいお付き合い」をしていると言った。Aさんの家族は年齢などを心配して「青年学級をやめたら」と言っているそうだが、その支援者に「Aさんやめないで」「Aさんがいないと学級会にならない」と言われるのでやめずに続けているととても嬉しそうに話した。また同じく長く学級を続けている学級生の名前を挙げ、仲が良いと言っていた。彼女は「Aさん、Aさん」と慕ってくれると嬉しそうに話した。
- ⑦これからやってみいたい活動：少し考えて卓球と答えた。また以前に他の市の青年学級と交流会や運動会をやったことを懐かしそうに話し、またやりたいと思って講師に話していると述べていた。
- ⑧生活や仕事へのつながり：質問の内容がわかりにくかったのか申し訳なさそうな表情で「うーん、特にないんだけど…」と話した。家族には学級を「やめたら」と言われるが、自分の意志では青年学級に来たいという思いをはっきりと語っていた。平日は仕事をして休日に青年学級があることは大変だが、楽しいと言っていた。自分は青年学級に来たいと思うと強調していた。

【考察】

講師や支援者に勧められて歌を歌うようになったことや、支援者に「Aさんやめないで」「Aさんがいない

と、学級会にならない」と言われること、友達が「Aさん、Aさん」と慕ってくれることを嬉しそうに話していたことなどから、Aさんが青年学級で自分に自信をもち、自己肯定感を高めていることが伺える。青年学級には認めてくれる仲間がおり、自分に自信が持てる場所だということがわかる。またそのことによって、学級でのカラオケを楽しみにするほど歌うことが好きになったというような生活の広がりにもつながっている。青年学級に来たいことを強調していたことから、Aさんの生活の中で青年学級はなくてはならない活動であることがわかる。

3.3 Bさん

24歳男性。B市障害者青年学級に参加。現在は家族と同居。日中は地域の作業所で働いている。作業所では週1回クラブ活動があり、エアロビクスや音楽などを楽しんでいる。その他にもダンス教室に通ったり、家族や友達と出かけたりと青年学級以外でも充実した余暇を過ごしている。

- ①学級歴：約5年。
- ②青年学級参加のきっかけ：職場の仲間に誘われて、一緒に青年学級に入ったと話した。
- ③青年学級の思い出：悩みながら「いろいろありすぎて難しいな」と言い、とくに何かの活動を挙げることはなかった。「青年学級でとくに好きな活動は何ですか」という問いに、「全部好き」と即答した。
- ④参加による変化や成長：質問の内容がわかりにくかったため「うーん」と考え込んで「ちょっと難しいです」と答えた。調査者が「友達が増えたとか」と例を挙げると「あるような気がする」と言った。また「お休みの人のことも、みんなもう少し受け止めてほしい」と、その日に休んでいた友達を例に出しながら話していた。「自然にそう思うようになった」そうである。さらに一人の友達の名前を挙げて「足下が危ないから、手を引っ張ってあげたりゆっくり歩いてあげたり、気をつけてあげたい」と話し、こうしたことは青年学級に入って気づいたと述べた。
- ⑤青年学級の友達と職場の仲間との違い：質問内容が難しくわかりにくかったために、はじめ「えー、難しいな…」と困った表情でつぶやいた。違いは「あまりない」と言い、青年学級でも職場でも同じように友達と仲良くしているそうである。青年学級では「みんなと同じことをやる」ということを強調しており、勝手な行動をしている人がいると「本当は怒りたくないけれど、怒りたくなってしまう」と話していた。
- ⑥友達への思い：いくつかの班に分かれて外出するときに「後ろから見ていると危ない気がする」と、周囲を気遣う様子がかがえた。深く考えながら「一人でいろいろ思いつくんです」「少しでもみんなが気分壊さないように楽しみたい」と話し、学級全体のことを考え、周囲に気を配っているようであった。また「これからも安心していろんな遊びを、それぞれ違うけど、無理のないように、自分に合ったペースで、できるだけ青年学級に来てほしい」という思いもはっきりと述べていた。
- ⑦これからやってみみたい活動：「みんながもっと楽しく、勝手なことをしないように、気分をもうちょっと盛り上げたい」と力強く話していた。学級の仲間に対しては「周りのことをよく考えてから行動してもらいたい」と言い、「みんなは大人だからすぐわかると思うけど」と付け足した。「そしたらもっと楽しくなります。一人で勝手に怒ったり泣いたり、それだけは好きじゃない。みんなで楽しくしていきたい」とさらに力強く語っていた。
- ⑧生活や仕事へのつながり：家庭でも青年学級と同じように「もう少し気分を盛り上げたいし、壊したくない」と話していた。「お母さんは家族のために頑張っている」と、家族を気遣う様子も伺えた。

【考察】

Bさんからは「お休みの人のことも、みんなもう少し受け止めてほしい」「足下が危ないから、手を引っ張ってあげたりゆっくり歩いてあげたり、気をつけてあげたい」など、常に友達を気遣う優しさが伺えた。青年学級でたくさんの友達とかかわるなかでそうした視点をもてるようになったことが推察される。また青年学級で「みんなと同じことをやる」ことには大きな意味がある。「みんながもっと楽しく、勝手なことをしないように、気分をもうちょっと盛り上げたい」「一人で勝手に怒ったり泣いたり、それだけは好きじゃない。みんなで楽しくしていきたい」など、Bさんからは全体への配慮と青年らしい積極性が感じられる。一人ひとりが大人としての自覚をもち、自分たちで楽しい活動を創っていきたいという主体性が表れている。

3. 4 Cさん

64歳女性。A市の障害者青年学級に長く参加している。現在はグループホームで暮らしており、「設備が良い」と満足している。日中は地域の作業所で働いている。休日や仕事の後はテレビを見たり、CDを聞いたり、一人で散歩をしたりしており、学級のない日も充実しているようである。

- ①学級歴：20年以上。はっきりとは覚えていないようであった。
- ②青年学級参加のきっかけ：「お友達に誘われて」と言っていた。
- ③青年学級の思い出：青年学級で楽しいこととして「外出」を挙げ、「表の方が気が楽。なかだと騒がしい」と話した。ヘルパーと出かけたりすることもあるが、足が悪く、普段の生活ではあまり遠出をしないようである。「お花が好きなのよ。あと景色見たり」と話し、青年学級の活動で近くの公園に行くことも好きなようであった。また今年行った合宿のことも話し、夜に宿舎の周りをみんなで散歩したけれど「坂が長いし、道がでこぼこだし、大変だった」と感想を語った。
- ④参加による変化や成長：「とくにないね」とさらっと答えた。きれい好きで、前に住んでいた家では「掃除とか洗濯とかやっていた」そうである。「今も休みの日とか仕事に行く前とか、今日みたいに誰かが来てもいいように、きちんと掃除しとくの。汗だくになって」と話していた。しかし「休日はだいたい一人か、どこかに行くときはヘルパーさん」と言っていた。もともときれい好きなので、青年学級に入って変わったということはないようである。Cさんはこれまで様々なコースを経験してきた。「料理も好き」で「グループホームでゆったりする」と言う。青年学級から誕生したサークル活動「お鍋の会」にも参加して料理をしていたが、人が多くなってあまりできないので、今はやめてしまったようである。
- ⑤青年学級の友達と職場の仲間との違い：職場にも青年学級に参加している人がいるようである。職場ではお互いに「いろいろ文句言ったりする」そうだが、青年学級ではそういうことがないと言う。
- ⑥友達への思い：「いまんとこない」と答えた。とくに誰と親しくしているというのはなく、誰とでも仲良くしているそうだが、青年学級では「相手の言ってることがわからなかったり」することがあるという。しかし「青年学級みたいに大勢で集まって何かすることはあまりない」「楽しい」と話していた。職場でもあまり話したりすることはないが、一人の女の子とはよく話すと言って名前を挙げていた。グループホームもおとなしい人が多く、「全然しゃべらない」が世話人さんとはお話すると言っていた。
- ⑦これからやってみたい活動：「表へ出るのがいいね。何か食べたりね」と話していた。「行ったことがあるところへ行くのと、新しいところに行くのではどちらが好きですか」と質問すると、「新しいところに行くのがいいね」と答えた。
- ⑧生活や仕事へのつながり：「とくにはないね」と答えた。日曜日が青年学級で、月曜日から仕事があるけれど「苦じゃない。帰ってからゆっくりできるし」と話した。

【考察】

Cさんは普段遠くへ外出する機会はほとんどなく、青年学級の活動で外出することを楽しみにしている。普段の生活で満たされない外出というニーズが青年学級によって満たされていることがわかる。「新しいところに行くのがいいね」と言うように、学級活動で様々なところへ外出することによってCさんの世界は広がっていると推察された。

3. 5 Dさん

42歳男性。A市の障害者青年学級に参加しており、毎年スポーツコースの班長を務めている。現在は家族と同居。普段は地域の作業所で働いている。青年学級がない時も家族で出かけたり、作業所や青年学級の友達とボーリングに出かけたり、卓球教室に通ったりと、活動的である。

- ①学級歴：20年以上。はっきりとは覚えていないようであった。
- ②青年学級参加のきっかけ：「みんな楽しくやってるから」参加したと話した。
- ③青年学級の思い出：昔は外出が多かったと言い、「江ノ島とか」に行つたと話した。また「みんなでボーリング行ったことが思い出」と語った。Dさんは毎年スポーツコースで活動している。一度だけ、人数の関係で生活コースに入ったことがあるそうだが、「お母さんにスポーツしなつて言われ」てスポーツコースに戻つたようである。母親は「動きやすいから」、体のためにもスポーツコースを勧めるのだと話していた。

家族でスポーツをすることはあまりないけれど、父親と相撲を見に行っていたことがあると話していた。

- ④参加による変化や成長：みんながボーリングを大好きになって、「また来年やりたいって言ってた」と嬉しそうに話していた。毎年コースの班長を務めているDさんは「みんな、やってくれて、頼りになるって言ってくれて」、だからまた続けようと思うのだとやりがいを感じているようであった。班長になって班長会に参加すると「帰りに飲みに行ける」と嬉しそうに話していた。青年学級に入ってから、「ピープルファースト」にも参加するようになったと言う。しかし「交通費出さないから」現在はやめてしまったそうである。「交通費出れば僕も行きたかった」と話していた。ピープルファーストでやっている内容は「結構難しかった。帰りも遅くなるし」と苦笑いした。「青年学級の方が難しくない。参加しやすい」と話していた。「青年学級ではピープルファーストのような難しい内容はしたくないですか」と尋ねると、少し考えて、「…うん。うん。うん。」と納得していた。
- ⑤青年学級の友達と職場の仲間との違い：「あんまり変わらない」とのことであった。同じ職場で一緒に青年学級に参加している友達もいて、休日に遊んだりしているそうである。
- ⑥友達への思い：質問の内容がわかりにくかったのか、何度か質問を繰り返しながら考えて、「来年も合宿行きたい」と話した。最近は毎回同じ場所に行っているため、他の所に行きたいと言っていた。また青年学級で特に仲が良い友達として、同じ職場の友達の名前を挙げていた。
- ⑦これからやってみたい活動：「もっと外出したい」と笑顔で言っていた。次に行きたいところは「ボーリングチャレンジ」。前回の活動でボーリングに行き、友達がハイスコアを出したので燃えているようである。また「キックベースやりたいけど、グラウンドがあいてないから困っちゃう」とも話していた。
- ⑧生活や仕事へのつながり：土曜日は家で料理をすと言い、青年学級で作った料理を家で作ることもあるそうである。「生活の中で困っていることなどはありますか」と尋ねると、「お兄さんが結婚してない」ということを少し心配していた。

【考察】

Dさんはボーリングが大好きである。青年学級で行ったボーリングが生きがいとなり、休日に友だちと練習に行くなど、豊かな生活につながっている。また長くスポーツコースの班長を務めているDさんは、仲間から頼りにされることでやりがいを感じている。班長を務めることによって自信をつけ、自己肯定感を高めていることがわかる。Dさんは当事者運動であるピープルファーストにも参加していた。青年学級で本人活動への意識を高め、力をつけていったことが伺える。

3. 6 Eさん

女性。A市の障害者青年学級に参加。現在は母親と同居。普段は地域の作業所で働いている。

- ①学級歴：約16年
- ②青年学級参加のきっかけ：「友達がいない、話す相手がいないから」青年学級に参加しようと思ったと話した。
- ③青年学級の思い出：「クリスマス会でサンタとトナカイの格好でプレゼント交換をしました。それが一番印象的です」と話した。またお父さんが亡くなった時のことが印象に残っていると言い、その時、青年学級で作文を書いたと話していた。
- ④参加による変化や成長：Eさんは青年学級でやりたいことをたくさん話して下さったが、「青年学級に入る前はこんなにたくさんやりたいことがありましたか」と質問すると「ない」と答えた。Eさんは、高校時代は友達がいたけれど職場に入ってからなかなか話す人がいなかったと言う。青年学級に入って友達が増え、いろいろな活動をし、やりたいことがたくさんできたと話した。
- ⑤青年学級の友達と職場の仲間との違い：職場では話す人がいないが、青年学級では学級生やスタッフと話ができることが嬉しいと話していた。
- ⑥友達への思い：「青年学級をもっと、来年も続けてほしい。来年もクリスマス会、餅つき大会をしたい」と話した。
- ⑦これからやってみたい活動：調査のために話すことを考えてきて下さったようで、青年学級でやりたい活動や最近の活動のエピソードを、勢いよくたくさん話して下さった。家では外出をしたり体を動かしたりする

ことが「全然ない」そうで、外出・スポーツへの希望がとくに強いようであった。外出については具体的な日程を挙げながら、「色々なところに行きたい」「電車に乗りたい」と話した。外出先として「ミカン狩り」「水族館」「(地域の)公園」「職場見学」などを挙げた。また外出先で「外食して帰ってくる」「駅でおみやげ買って帰りたい」などの希望も述べていた。スポーツに関しては「ボーリング」「キックベース」「スポーツ大会」「代々木公園で体を動かしたい」などの希望を挙げていた。職場の方に「寝てばかりいないでやせろ」と言われると話していて、体や健康のことも気にしていると言う。Eさんは最近スポーツコースを選ぶことが多いが、「次は違うコースに入りたい。外出をたくさんしたい」と話していた。しかし後から「来年はもっと楽しい活動にしたいから、来年もスポーツに入りたい。運動会とか好きなスポーツがやりたい」とも話していた。A市の青年学級の恒例行事である「開級式」「成果発表会」「語る会」「わかそよ」にも出たいと張り切っていた。新年会では「カルタ作り」「福笑い」「プレゼント交換」がやりたい、「アイスクリームも食べたい」と話していた。合宿では「夕食のサラダ作りもしたい」「そうめん流し大会もしたい」と、調理活動の希望も伺えた。さらに今年度はEさんが参加している青年学級が20周年なので「職場と青年学級の組み合わせの作文を発表したいです。お家のことも」と話し、記念の文集を作りたいと言っていた。

- ⑧生活や仕事へのつながり：毎年、市と都のスポーツ大会がそれぞれあり、職場で出場しているそうである。青年学級のスポーツ活動を活かして、大会で活躍したいと話していた。まだ出たことがないので、「リレーにも出たい」と語った。

【考察】

「友達がいなくて、話す相手がいなくて」青年学級に参加するようになったEさんは、青年学級に入って話ができる友達がたくさんできた。職場と家の往復で出会いの機会が少ない青年に、青年学級は多様な人との出会いや人間関係を保障している。家では外出をしたり体を動かしたりすることが「全然ない」Eさんはスポーツニーズが高い。普段の生活の中で満たされないスポーツニーズが、青年学級によって満たされていることがわかる。

3. 7 Fさん

38歳男性。B市の障害者青年学級に参加。現在は姉の家族と同居。普段は地域の作業所で働いている。「疲れちゃうけどね、一年間、最後までやってすっきりしたいなと思って」「自分のしもやけを治して、作業ができるようにしたい」などと話しており、責任感をもって仕事に取り組んでいる。

- ①学級歴：10年弱。はっきりとは覚えていないようであった。
- ②青年学級参加のきっかけ：青年学級に参加している友達に誘われて、姉も許してくれたので入ったと話した。「青年学級に入ったら楽しいことがあるって入ってきました」と語った。
- ③青年学級の思い出：シンバルで「ドレミファソラシド、ちゃんちゃん！」と演奏したという思い出を語った。「おもちゃのちゃちゃちゃ」を演奏したり、笛も演奏したそうである。「歌うのが好きなんです。何年も」と話し、「どの歌が好きですか」と質問すると「ええとね…」と考え込んだ後、「いろんな歌を歌っているからねえ。夕焼けこやけ～歌ったり。みんなでそろってやってるんです」と、歌のメロディーを口ずさみながら語った。青年学級以外でも「そういう時間があつたらやりたい」と思っているそうである。作業所では「音楽を歌ったりして、クリスマス」をやると言い、そこでやることは「自分たち、本人が決め」ているそうである。また年度末にもらえるスタッフ手作りの賞状のことを何度も語っており、印象に残っているようであった。
- ④参加による変化や成長：Fさんは「周りの状況を考えずに言い方がかーって」なったり、「相手が嫌な言葉で否定したり」「歩いてもどっかに行っちゃう」など「ルール守れなくて」「自分の勝手になっちゃう」ことがあると言う。だから担当の人に「どこに行くか断ってから」にするなど、「勝手にしないことと、ルールを決めたことと、ちゃんと守って」いきたいと考えている。こうしたことに気をつけようと思うようになったのは青年学級に参加してからだそうである。「姉さんが許してくれて、やっと」青年学級に入ったので、友達と「仲良くしたい」という思いが強いようである。
- ⑤青年学級の友達と職場の仲間との違い：作業所の同僚の方のかかわりについて尋ねると、自分の「言い方が悪くなってっちゃう」時があると語った。いろいろなことを考えて不安になると「怖い顔になっちゃう」

「嫌なことなっちゃう」ので、「普通に正しいことを考えてから、話すことができないなと思って」いるそうである。作業をやっている職員に怒鳴って注意されると「不安になって」「嫌なんです」。だから「やっちゃいけないこと、悪い言葉、正しい言葉、それを考えてやろうと思って」「きちんと、正しい言葉をゆっくりと話すことがいいなって、好きなんです」と話していた。「青年学級ではどうですか」と尋ねると、Fさんが一人になった時のことを姉が心配していると語っていた。Fさん自身は「一人になっても、(青年学級など)楽しいこととかがあったりして、お昼はここで買って、ここで食べて、なんか好きなことをやりたくなって思って考えています」と話していた。「青年学級は、友達と仲良くすることと、楽しいことと、やりたくなって思って考えて」いると言う。「みんなで個人で考えて、それから、いろんなことをやって」いきたいそうである。「自分の勝手にしない」と自分に言い聞かせるように語った。「みんなを助けるもの」がやりたいとも話した。

- ⑥友達への思い:「普通に、友達と一緒に仲良くしたいなと思って考えています」「みんな青年学級入って、友達と仲良くすることがいいなって考えている」と語った。また「(青年学級に)友達を連れてくるのは違って、本人が行きたい」という気持ちがないといけないということも強く述べていた。
- ⑦これからやってみたい活動:青年学級ではみんなと仲良くして「楽しいこと、なんかやりたくなって」考えていると言う。また友達への接し方について「周りの状況を考えてから言うこと」や注意するときにも「いけないよ」とやさしい口調で伝えることなどを気をつけていきたいと話していた。「職員は覚えておいてほしい」「みんなは別なんです。職員は職員で」と、学級生は本人の意思で「自分で青年学級に入って」いるが、職員が入る場合は、誰か他の職員が「良いて言っていないとだめ」なのだと話した。もっと職員とたくさんかわりたいという強い希望ももっているのだが「そこがちょっと難しいです」とも話していた。職員とは青年学級の講師やスタッフのことを言っていた。また青年学級には「注意をする人」が「誰もいない」ということを指摘していた。「職員が優しいことは良いんだけど」「ダメならびしっとしないと」いけないと考えているそうである。だから講師やスタッフには、自分達が良くないことをしたときは遠慮せず注意してほしい、加えて「周りの状況を考えていってほしい」とも話した。
- ⑧生活や仕事へのつながり:歌ったり音楽を聞いたりして「自分がやりたいってことを出してる」、自分で考えそれを相手に伝えることを心がけている様子が伺えた。また「お仕事で頑張って、青年学級に入ってきたんですよ」「会費を払ったりしてるんです」「積立金をやってるんです」など、青年学級があることで仕事も頑張っているようであった。Fさんは、将来は「一人の生活」をしたいと自立生活への希望を持っている。青年学級は「一人になっても、みんなと友達や先生、職員たちがいるし、話を聞くことができる」場所であり、「スポーツをやったり」「音楽をして」「楽しい」。「そんなところがいいな」「一人になっても活動をした」と考えている。

【考察】

「(青年学級に)友達を連れてくるのは違って本人が行きたい」という気持ちがないといけないという話からは、自分の意志・自己決定を尊重してほしいという強い思いが伺える。一人ひとりが意志をしっかりとって青年学級をやっていくために、Fさんは自分の言動に気をつけようとしている。またルールを決めてみんなで注意し合っていくことも必要になる。そのために講師やスタッフには、良くないことをしたときに遠慮せず注意してほしい、そういう関わり方を求めている。「一人になっても、みんなと友達や先生、職員たちがいるし、話を聞くことができる」という話からは、青年学級が地域の大切な居場所として、また社会とつながる場所として機能していることがわかる。

3. 8 Gさん

女性。B市の障害者青年学級に参加。現在は寮生活。寮は「みんな一緒に」いてにぎやかだそうである。日中は地域の作業所で働いている。休日は一人で電車に乗り、街に出たり買い物をしたりする。公園を散歩することもあると言い、青年学級がない日も充実しているようである。

- ①学級歴:長く通っているが、覚えていないとのことだった。
- ②青年学級参加のきっかけ:料理が好きで「お料理がしたかった」そうである。
- ③青年学級の思い出:思い出に残っていることは「修学旅行」と言っていた。修学旅行では「歌ったりゲーム

したり」「おみやげ買ったり」「飲み物買ったり」するそうである。前回の活動で見た映画のことも「あれ良かったね」と楽しそうに話していた。レンタルショップで映画を借りてきて自分の部屋で見ることもあるそうである。来年の活動で映画館に行くという計画があり、「どこの映画館行くだらうね」と話していた。

- ④参加による変化や成長：少し考えて「知らない人もいるじゃん。ボランティアで入ってくる人もいる。初めて入ってくる人もいる」と言っ、前にボランティアで来ていたという女性の名前を挙げていた。青年学級では今まで会ったことがない人と会うことができ、成長につながっているようである。
- ⑤青年学級の友達と職場の仲間との違い：質問の内容が分かりにくく、少し悩んで「あんまりわかんないなあ」と答えた。調査者が「職場ではあまり話さないけれど、青年学級ではたくさん話しますという人もいました」と例を示すと、「ここでもしゃべるよ。青年学級のときもしゃべる。」と言っていた。
- ⑥友達への思い：「とくに仲が良い方がいますか」という質問に対して少し考えた後、「みんな友達だからねえ」と言った。Gさんは長く青年学級に通っているの、たくさんの人と友達になることができると話した。
- ⑦これからやってみよう活動：「いろんなことやってるからね。楽しいこといっぱいあって」と話した。年末にある忘年会の活動を楽しみにしているようであった。いくつかの係に分かれて準備をするそうで、去年は自分で希望して、看板係をやったそうである。「看板作ったり、折り紙を貼ったりする」という。
- ⑧生活や仕事へのつながり：「あんまりない」と即答であった。「お料理は随分できるようになりましたか」と尋ねると、「うん」と肯定していた。調査者が、前に青年学級の活動でやったキックベースの話題を出すと、「見るの好きなんです。蹴るときもあるし」と話した。

【考察】

普段一人で出かけることが多いGさんだが、青年学級で様々な人とかわり、話をしたりすることで生活が豊かになっていることが伺える。

3. 9 Hさん

20歳女性。B市の障害者青年学級に参加。現在は家族と同居。普段は地域の作業所で働いている。ダンスが得意で調査の時にも踊ってみせて下さった。職場ではクラブ活動もあり、青年学級がない時も充実しているそうである。今の夢は「嵐」に会うことと笑顔で話した。

- ①学級歴：2, 3年。
- ②青年学級参加のきっかけ：地域のお祭りのときに、高校の先輩でもある職場の先輩から誘われたと話していた。「そういうこと初めてだけど先輩もいたから」参加することにしたが、「友達を作りたい」という思いもあったそうである。
- ③青年学級の思い出：「青年学級ではどんなことが楽しいですか」と尋ねると、すぐに「一番は友達作ることですね」と笑顔で答えた。青年学級に入って友達が増えたと話していた。話すことが大好きで「青年学級ではたくさんお話しする」と嬉しそうであった。家でも母親とよくおしゃべりをするそうである。
- ④参加による変化や成長：「すーごい成長しましたよ」と話した。「人それぞれだから」とか「私も一緒にやるって言うってみる」とか、前向きな言葉も語っていた。青年学級に入ることができるようになったことは「遊び」。
- ⑤青年学級の友達と職場の仲間との違い：高校の思い出が印象に残っているようであったので、「高校の友達と青年学級の友達は違いますか」と質問したところ、高校の時にいじめられた経験を語った。楽しい思い出もたくさんあるけれど、友達関係で辛いこともあったそうである。青年学級ではそういうことはなく、安心して参加していると話していた。また職場でもたくさんのお話をし、みんなと仲良くしていると話していた。
- ⑥友達への思い：「一緒にやることですね、やっぱり。一緒にやっていきたい」と語った。
- ⑦これからやってみよう活動：「公園に行ったり、遊んだり」したいと話し、「こないだのキックベース、面白かったです」と言っていた。趣味のダンスを青年学級ではまだ披露していないそうだが、「すると思います」と張り切っていた。
- ⑧生活や仕事へのつながり：「仕事もちょっと疲れてるんですけど、掃除したりとか、トイレ掃除やってるん

です。」と、仕事で疲れても家の手伝いなどを頑張っていると話していた。「これからも青年学級を続けていきたいと思っていますか」という問いには「はい、そうですね」と答えた。

【考察】

Hさんは青年学級で楽しいことは友達を作ることと話した。高校の思い出が強く印象に残っているようであったが、卒業後社会に出ると人間関係や活動範囲が狭くなる。そうした中で青年学級において新しい友達と出会い、様々な活動をするには大きな意味があると推察される。

3. 10 Iさん

25歳女性。B市の障害者青年学級に参加している。現在は寮生活。日中は地域の作業所で働いている。

- ①学級歴：7、8年。
- ②青年学級参加のきっかけ：「友達に誘われたのですか」という問いかけに対し、「ううん自分で」とはっきり答えた。
- ③青年学級の思い出：絵が好きで、青年学級で絵を描くことが楽しいと話していた。「とくに思い出に残っていることはありますか」という質問に対しては少し戸惑った様子で「いつも楽しい」と答えた。高校時代はバドミントンをやっていたので運動も得意だと語った。青年学級でやったキックベースも得意な活動だそうである。前に見た映画は「面白かったです」と笑顔で話していた。学級活動で映画館に行くことも楽しみにしているそうである。普段は映画館に行くことや映画を見ることはなく、家でテレビを見たりして過ごしていると話した。青年学級がいろいろな人とかかわる良い機会になっている。
- ④参加による変化や成長：質問の内容がわかりにくいようであったが、「友達が増えたりしましたか」との問いかけに「はい増えました」と微笑んだ。
- ⑤青年学級の友達と職場の仲間との違い：質問の内容がわかりにくく、「えー」と不安そうに考え込んでいた。「職場ではあまり話さないけれど青年学級ではたくさん話すという方もいましたが、Iさんはどうですか」と尋ねると、「(職場でも青年学級でも)話すよ」と答えた。接し方に変わりはないという。
- ⑥友達への思い：高校の後輩であり、同じ職場の仲間でもある友達の名前を挙げ、彼女を青年学級に誘ったのは「私です」と嬉しそうに話していた。彼女とは青年学級でもとくに仲が良いそうである。青年学級ではいろいろな人と話すのではなく、何人かの仲が良い友達と話すことが多いと言っていた。伝えたいこととしては「仲良くしたい」と言っていた。
- ⑦これからやってみたい活動：はじめ不安そうに考え込んでいたが、しばらくして「調理かな。全然してないから」と笑顔で答えた。仕事でケーキを作ることはあるが、寮では料理をする機会はないという。
- ⑧生活や仕事へのつながり：「お料理は寮でできそうですか」という問いに、「うーんどうかな…」と自信がなさそうな様子であったが、たまには自分で作ってみたいと思っているそうである。

【考察】

普段は家でテレビを見るなどして過ごしているというIさんだが、休日には青年学級でたくさんの友達と楽しく活動している。また、普段の生活の中で調理をする機会ほとんどないけれども、やってみたいという気持ちはもっており、青年学級での活動がそうしたIさんのニーズに答えている。

3. 11 Jさん

37歳女性。B市の障害者青年学級に参加。現在は家族と同居。会社に勤めていた経験もあるが、現在は地域の作業所で働いている。調査の間は終始緊張していた様子で、職場の仲間と話している時の声や表情とは随分違う雰囲気だった。

- ①学級歴：「わからない」と答えた。
- ②青年学級の思い出：「青年学級では何が楽しいですか」という調査者の問いかけに、「いっぱいある」と表情を緩ませた。一番楽しい活動として「キックベース」を挙げ、最近の学級活動でキックベースをやった話をした。「思い出に残っていることはありますか」という質問に対しては、困ったような表情で目線を外してしまった。「修学旅行と答えた人が多かったのですが、Jさんはどうですか」と問いかけると、「楽しい」と言った。毎年参加しているようで、「宴会をする」と話した。調査者が前回の活動(映画鑑賞)の話題を出

すと、表情が緩み、笑顔が見られ、「面白かった」と語った。

- ③参加による変化や成長：「んー…」と困っている様子であった。質問の内容もわかりにくいようであった。
- ④青年学級の友達と職場の仲間との違い：職場でも青年学級でも色々な人と話すので、あまり変わりはないそうである。
- ⑤友達への思い：「んー…」と困っている様子であった。
- ⑥これからやってみたい活動：「んー、ちょっと…」と申し訳なさそうに答えた。答えづらいようであった。
- ⑦生活や仕事へのつながり：「んー、わかんないちょっと…」と困っている様子であった。質問の内容もわかりにくいようであった。「これからも青年学級を続けていきたいですか」という調査者の問いかけに対しては、「ああ」と笑顔を見せた。

【考察】

調査に当たって調査者との信頼関係が不十分であったことや、質問の内容がわかりにくかったという問題があり、とても緊張していたようであった。そのために答えに困ってしまう場面が多くあった。しかし具体的な活動の話の途中に見せた笑顔などからは、青年学級に対する肯定的な気持ちが伺えた。

3. 12 Kさん

46歳男性。A市の障害者青年学級に参加。現在は寮生活。自分で料理をするなどして健康に気を付けている。一般就労をしており、責任感をもって仕事を頑張っている。仕事への思いを熱く語ってくれた。

- ①学級歴：約29年
- ②青年学級参加のきっかけ：友達に誘われ、母親も賛成してくれたので入ったと話した。「どんなことがやりたくて青年学級に入ったのですか」という質問に対して「歌、スポーツ、生活のこと、ミュージカルなんかがあった」と当時あったコースを挙げた。「一人ではできないことをしたかったということですか」と尋ねると、「まあそうですね」とさらっと答えた。
- ③青年学級の思い出：10年ほど前に仕事で大けがをして入院したときに、スタッフがお見舞いに来てくれたことを話していた。また日帰りで電車に乗って青年の家に行ったことも思い出に残っているようである。「健康のことを考えてるから」最近は料理などを多くできる生活コースを選ぶことが多いという。「昔はスポーツ（野球）やったりしたけど、今の関心は芸能人だから」と話した。
- ④参加による変化や成長：「話し合いの時は、相手がやりたいって言ったことと同じことをやりたいって言うようにしてる」と言い、相手の意見を大切にしていることが伺えた。
- ⑤青年学級の友達と職場の仲間との違い：「ほとんどないけどね」と話した。職場では「なかなか頼りにされてる」と話し、責任感をもって仕事に取り組んでいる様子が伺えた。「でも失敗しそうで泣いたこともあるよ。厳しさも優しさもある」と語った。
- ⑥友達への思い：これまで青年学級で出会った友達の名前を感慨深そうに何人か挙げて、エピソードを話した。「青年学級で友達をつくりたかった」と語った。
- ⑦これからやってみたい活動：流しそうめんを来年もやりたいと話した。また「昔やった他の青年学級との交流も面白かった」と言い、「やっぱりまたやりたい。やらないとだんだんやる気がなくなるんだよ」と話した。また「土曜が仕事で、わかそよの実行委員会になかなか行けないけど行きたい」と話していた。本番は毎回出演しているようである。
- ⑧生活や仕事へのつながり：「やってみせるぞ!」「青年学級にきて、外出一緒に行こうよ!」と意気込んでいた。青年学級は元気をもらえる場所だと話した。

【考察】

寮生活で健康のことを気にしているKさんは、調理活動に関するニーズがある。最近は生活コースで活動し、そうしたニーズが満たされている。責任感をもって仕事に取り組んでいるKさんだが、「でも失敗しそうで泣いたこともあるよ。厳しさも優しさもある」という言葉に表れているように、不安や辛さを感じることもある。一般就労をしているKさんは、青年学級で同じような困難をもつ仲間や理解してくれる仲間と一緒に活動したり、思いを語り合ったりすることには大きな意味を感じている。青年学級は元気をもらえる場所であるという話からもわかるように、青年学級での活動が、仕事や生活を支える力にもなっている。

3. 13 Lさん

44歳女性。B市の障害者青年学級に参加。現在は寮で生活をしているが、休日はよく母親と出かけるそうである。青年学級がない時も休日は充実していると話していた。普段は地域の作業所で働いている。

- ①学級歴:「どのくらいかねえ。ちょっと、わかりません。忘れまして」と話した。
- ②青年学級参加のきっかけ:現在の暮らしている寮の寮母さんに聞いて参加するようになった。
- ③青年学級の思い出:青年学級では、開級式や修了式、忘年会などの行事の時に「ピアノ伴奏」をすることが楽しいと話していた。ピアノは5歳から習っているそうである。一番思い出に残っていることとしては、ピアノ伴奏の他に「春の旅行」を挙げていた。忘年会の活動では自分で希望をして料理係をやり、「お料理は好きです」とはりきって活動したことを話した。「なぜお料理係を選んだのですか」という質問に対して「私どうしてもやりたかったものですから」と答え、「今年の忘年会でもお料理係をやりますか」と質問すると「私、楽しみに待ってます」と語った。
- ④参加による変化や成長:質問の内容がわかりにくそうで「特にありませんけど…」という答えであった。
- ⑤青年学級の友達と職場の仲間との違い:質問の内容がわかりにくいようであった。職場でも青年学級でも友達とおしゃべりをしたりして、仲良くしているそうである。
- ⑥友達への思い:「ありません」と即答であった。青年学級に入って友達は増えたけれど「作業所にも青年学級の友達いるもんですから」と話していた。筆者が参加した活動時、Lさんは欠席であったが、スタッフが反省会をしているところに顔を出した。その時の事を聞いてみると「終わってからちょっと来ました。顔出しました。会いたかったもんですから、先生や友達に」と話した。
- ⑦これからやってみみたい活動:「デイキャンプ」がしたいと話していた。夏は「暑くて参加したい気分はない」そうで「毎年行ってない」そうである。時期が良ければ参加したいと言っていた。また「1月以外には書道をしたい」「DVDを見たりしたい」とも話していた。今後の活動で映画館に行くことも楽しみだそうである。
- ⑧生活や仕事へのつながり:「ありません」と答えた。作業所でも音楽の活動をしていて、そこでもピアノ伴奏をしていると話していた。「手のひらを太陽に」などの曲は、青年学級でも作業所でも演奏するそうである。「これからも青年学級を続けていきたいと思っていますか」という問いかけに対して「はい」と声を高くして答え、「楽しいものには参加したいです」と付け加えた。

【考察】

Lさんは青年学級で得意なピアノで伴奏をすることが楽しいと話していた。好きなことを活かして活躍できる機会が青年学級にはある。また忘年会では「どうしてもやりたかった」お料理係を務めるなど、青年学級は自分のやりたいことができる場でもある。活動に参加できなかった時の「終わってからちょっと来ました。顔出しました。会いたかったもんですから、先生や友達に」という話からは、青年学級の仲間がLさんにとってかけがえのない存在であり、青年学級で会えることを楽しみにしている様子が伺える。

3. 14 Mさん

26歳女性。B市の障害者青年学級に参加。現在は家族と同居。日中は地域の作業所で働いている。作業所で週一回行うクラブ活動では会長を務めているそうで「みんなで色々話し合ったり、いろいろ決めごとをしたり」と嬉しそうに話した。青年学級の活動がなくても家族で出かけるなど、休日も充実している。

- ①学級歴:約5年
- ②青年学級参加のきっかけ:友達や母親が探してくれて入ったと話した。
- ③青年学級の思い出:青年学級では「みんなで歌を歌ったり」「お料理もやったり」することが楽しいと話した。「一番思い出に残っていることは何ですか」と尋ねると、なかなか思いつかない様子であった。去年の忘年会の活動では受付係をしたそうである。毎年「その時その時でいろいろ」な係をすることやお客さんで市長さんが来るが、顔見知りな人もいるのでそこまで緊張しないと話した。
- ④参加による変化や成長:青年学級も作業所も同じ駅なので、「行き帰りは電車を使って一人で大体」通えるようになったことや友達が増えたことを話した。
- ⑤青年学級の友達と職場の仲間との違い:「作業所はいつもみんなでわいわいやってるけど、青年学級ではそ

こまででもない」「青年学級はいろんな人がいるので、作業所みたいには楽しいかわり方はちょっと」と話した。青年学級でも同じ作業所の人と仲良くしているそうだが「楽しく青年学級は行っている」と語った。「青年学級はいろんな年齢が上の人とか、別の仕事してる人も」いることも関係しているようである。「今あまりしゃべらない方とは、これから先ももっとかかわっていきなと思うことはありますか」という質問に少し困ったような笑みを見せ「話すのが楽しいので、話したりできる、作業所の友達みたいのでできる人と」と答えていた。

⑥友達への思い：少し考えて「とくにはない」と答えた。

⑦これからやってみみたい活動：青年学級ではいろいろな活動を幅広くやっているので、例えば「お料理もあるんだけど、回数がちょっと少なかったり」「AグループとBグループに分かれているので音楽とお料理だったり。どっちかを休んじゃうと音楽に出ても次のお料理には出られなかったり」など、用事などで休んでしまったときに少し残念だと話していた。

⑧生活や仕事へのつながり：質問の内容がわかりにくいために「あんまりわかんない」と答えた。

【考察】

Mさんは職場での人間関係やクラブ活動が充実しており、青年学級には自分のペースでかかわっている。「みんなで歌を歌ったり」「お料理もやったり」することが楽しいという話や「楽しく青年学級には行っている」という言葉から、友達と一緒に楽しく過ごすことが充実した仕事や生活にもつながっていることが伺える。

3. 15 Nさん

20歳女性。B市の障害者青年学級に参加。現在は家族と同居。たまに家族旅行に行くこともあるそうだが、「日曜日なんもない日はどこも行かない」と話していた。普段は地域の作業所で楽しく働いている。

①学級歴：2, 3年。

②青年学級参加のきっかけ：母親に紹介してもらったと話した。

③青年学級の思い出：「友達をつくることかな」と話した。「どんなことが楽しいですか」と質問すると「旅行に行くのが好きかな」と答えた。出かけることが好きだそうである。

④参加による変化や成長：質問の内容が分かりにくく「あんまりない」と答えた。

⑤青年学級の友達と職場の仲間との違い：少し考えながら、青年学級で一番仲がいいという女性の名前を挙げた。また同じ職場で青年学級に参加している友達の名前も挙げた。「いろんな人がいて嬉しいな、友達」とも話した。

⑥これからやってみみたい活動：「もう調理でしょ、調理しかないよ」「お料理大好きだもん」と話した。家でも料理の手伝いをするそうである。青年学級では好物の「カレーライス」を作りたいと語った。普段は講師に自分のやりたいことを伝えることはあまりないそうだが、今回話したことを「青年学級に行ったら発表すればいい」「講師の先生に自分から言えばいい。言わないとなんも始まらない」と意気込んでいた。

⑦生活や仕事へのつながり：「例えば学級で作った料理をおうちで作ってみるとか」と調査者が例を示すと「作るとしたらカレーしか作らない」と答えた。「青年学級行くと楽しい。友達たくさんいるから」とも語った。

【考察】

一番の思い出として「友達をつくることかなあ」と話していたことや、「いろんな人がいて嬉しいな、友達」「青年学級行くと楽しい、友達たくさんいるから」という言葉などから、Nさんが青年学級での友達との出会いや関わりに満足していることが伺える。青年学級が多様な人との人間関係を保障していることがわかる。また今回、調査の時に話したことを青年学級で発表したいということから、自分の意志ややりたいことをもっと出していこうとする積極性が感じられた。

3. 16 Oさん

20歳男性。B市の障害者青年学級に参加。現在は地域の作業所で働いており、作業で行うクッキー作りのことをとても楽しそうに話した。

- ①学級歴：2，3年。
- ②青年学級参加のきっかけ：同じ職場の友達に教えてもらったと話していた。
- ③青年学級の思い出：「青年学級ではどんなことが楽しいですか」と質問し，調査者が「音楽」「料理」「キッチンベース」「映画」など例を挙げていくと，繰り返し声に出しながら，とくに「音楽」「キッチンベース」「映画」の時に声のトーンが上がった。どの活動も楽しんでいる様子で，修学旅行も思い出に残っているそうである。去年の忘年会では，自分で希望して「給食」係をやったと話した。
- ④参加による変化や成長：青年学級にもたくさん友達がいると話しており，「青年学級に入って，友達が増えましたか」という質問に「はい，そうです」と答えた。
- ⑤青年学級の友達と職場の仲間との違い：青年学級でも職場でも友達と話をしたり仲良くしたりしているそうであるが，「職場と青年学級ではどちらの方がおしゃべりしますか」という質問には「職場です」と答えた。
- ⑥友達への思い：青年学級で仲の良い友達として同じ職場の友達の名前を挙げていた。彼はOさんのお兄さんの存在のようであり，職場でも青年学級でも仲良くしているそうである。調査の途中にも親しそうに声を掛け合っていた。
- ⑦これからやってみたい活動：「忘年会です」と即答した。また仕事のクッキー作りを強調しており，「青年学級でも作りたいですか」という問いに対して「はい」と答えた。
- ⑧生活や仕事へのつながり：「これからも青年学級に参加したいですか」という問いかけに笑顔で「はい」と答えた。

【考察】

質問に対する肯定の答えや雰囲気から青年学級の活動を楽しんでいる様子が伺えた。信頼できる仲間のいる青年学級で楽しく活動することが，Oさんの生活リズムとなっている。

3. 17 Pさん

35歳男性。A市の障害者青年学級に8年間参加した後，発展学級である「とびたつ会」に移った。現在は家族と同居。普段は地域の作業所で働いており，社会人としての自覚を強くもって仕事に取り組んでいる。

- ①学級歴：障害者青年学級に8年間在籍，その後とびたつ会に移って約5年。
- ②青年学級参加のきっかけ：とびたつ会ができた当時は「青年学級の活動をやりたいから，とびたつ会に行かない」と思っていたそうである。しかし青年学級で8年間活動し，「もう十分だと思って」とびたつ会に移ったと言う。「理由はいろんなことに挑戦したいからと，いろんな話し合いをしたいから」。青年学級よりもとびたつ会の方が，このような希望に合った活動ができると思ったそうである。そして現在「とびたつ会に入ったので，やっぱりこれでいいんだ」と思っていると話していた。とびたつ会は歌作りなどの活動を通して，「自分の今までのことを思いながら，どんなことを考えながらやってきたかってことが話せる場」であると言う。Pさんはそうした話をたくさんしたいという希望があったそうである。
- ③青年学級の思い出：「いろんな所の人と話したり，コミュニケーションを取ったりするのが，それもつながっているんなことがつながっているのかな」と話していた。Pさんは聞くことや伝えるということをととても大切だと考えていて，普段はパソコンのメールなどを使って職場の人やとびたつ会の人と連絡を取ったりすると話していた。
- ④参加による変化や成長：とびたつ会は「わかそよ」の実行委員の中心になっている。「お客さんにどういうことを，コンサートの中で伝えていけばいいのか」ということを考えながら準備を進めている。「なぜ僕たちがこのコンサートをやってきたのかっていうのと，やっぱり歌を知ってもらおうこと」と話し，コンサートをすることによって，「職場の人に聞かれたときに，とびたつ会のことが上手く伝えることができる，知ってもらえる」と語った。Pさんはこれまで「もう，伝えるってことがどれだけ大変かというのを僕は知ってきた」，そして「そういうことが今まではできなかった」と言う。それは「機会がなかったのと，それから自分の考えが出てこなかった」からだそうである。青年学級ととびたつ会，両方の活動を通してだんだんと伝えることができるようになったのである。「いろんな人に支えてもらいながら，いろんなことができたのかな」と語っていた。また今までは自分たちで自分たちの歌を「作れないと思ってたけれど，それができるようになったので大きいことですね」と話していた。このように充実した活動は「仕事と別だからできるん

じゃないですかね」。「職場って仕事するって所と決まってるけれど、とびたつ会はやっぱり自分たちで創りあげていく活動、そこに大きな違いがある」と語った。

- ⑤青年学級の友達と職場の仲間との違い：「仕事場だと仕事場なんだから、仕事のことを相手に伝えなきゃいけない」「しかしとびたつ会では職場と違う話ができる。いろんな話ができることも良いし、歌ができることも良い」。Pさんは「職場は職場、とびたつ会とはとびたつ会と頭を切り換えてる」と言う。「職場とは違う人がいるってこと」、つまり職場とは違う人間関係が大切だと考えているそうである。「職場だけだとちょっと頭が切り替わらなくて、限界がどっかにあるんでしょね。息抜きもあって、これも大事だなんて考えてるんですよ」と語った。
- ⑥友達への思い：とびたつ会は「話しやすい場」なので、自分の思いや伝えたいことは「伝えてもらう」と話した。また「その人とこの人が理解してるかっていうと、いろんなことがあってよいと思うんですよ。それは差別じゃなくて、こういう人もいるんだよ」と思っているそうである。
- ⑦これからやってみたい活動：「歌を作っていきたい」と話し、2007年に「わかそよ」のために作った曲のエピソードを話していた。とびたつ会では歌作りの活動を積極的にやっており、「やっぱりそれをするのがやっぱり面白いですかね。やっぱりまだまだ新鮮で」と話した。自分の伝えたいことを歌にのせて伝えられる喜びが大きいそうである。
- ⑧生活や仕事へのつながり：「休日にとびたつ会に来ることで、次の日から仕事を頑張ろうとか、そういう気持ちもらえる場所ですか」と尋ねると、「もらえますね。すごく力になりますね」と力強く答えた。

【考察】

「とびたつ会はやっぱり自分たちで創りあげていく活動」という言葉からもわかるように、本人の会は青年学級に比べ、より本人・当事者主体の活動を行っている。誰かに決められたのではなく、自分たちで決めたことをやっていくところに良さがある。Pさんは初めからとびたつ会に参加したのではなく、青年学級で十分に力をつけてから移った。青年学級はとびたつ会へのパイプ役も果たしており、本人活動に向かって青年が力をつけ、自信をつける場でもある。伝えることの大変さを実感してきたPさんは、青年学級ととびたつ会、両方の活動を通して、思いを伝える力をつけてきた。青年学級やとびたつ会は、自分の思いや考えを語り合い伝えることのできる場であり、そうした機会が保障されている。そうした中で、様々な考えを認め、様々な人を認め合う雰囲気ができている。また「職場だけだとちょっと頭が切り替わらなくて、限界がどっかにあるんでしょね。息抜きもあって、これも大事だなんて考えてるんですよ」と言うように、特定の環境・関係性のなかだけで生きていくことはとても窮屈である。そうしたなかで青年学級やとびたつ会など職場とは別の居場所があるということには意味があり、仕事や生活を頑張ろうという力につながっている。

3. 18 Qさん

男性。A市の障害者青年学級に参加しているが、最近は発展学級であるとびたつ会にも合わせて参加し始めた。現在は作業所で働きながら、併設されている福祉ホームで生活をしている。作業所の仲間とは仲が良く、週に一度みんなでお酒を飲むことや生け花の活動なども楽しんでいる。

- ①学級歴：半年前から青年学級に参加し始めた。とびたつ会には調査の日が初めての参加。
- ②青年学級参加のきっかけ：これまでは「見る側」だった「わかそよ」に自分も出たいという思いがあったという。同じ職場でA市青年学級に参加している友達から「若葉とそよ風のハーモニー入ったら」と言われて青年学級に参加し始めた。さらに同じ職場でとびたつ会に参加している友達から「わかそよの実行委員もあるよ」と聞いてとびたつ会への参加も決めた。「もともと1年だけ青年学級をやって、そのあととびたつ会に来ようと考えてた」そうで、「今は二つ掛け持ち。でも一つやめちゃうよ。とびたつ会をやっていきたい」と話している。青年学級ではなく、とびたつ会を続けようと思ったのは「〇〇ちゃん（とびたつ会の参加をすすめてくれた友人）のおかげ」と語った。
- ③青年学級の思い出：「たんぼぼ（学級でよく歌う曲）」が弾ける。ピアノでね」と言い、ピアノが得意。「ピアノが持っている。弾けるよ、右で弾ける」と嬉しそうに話した。
- ④参加による変化や成長：ピアノが得意なQさんは筆者に、「僕らの輝き」という学級ソングの楽譜に音名を書いて欲しいと頼んできた。「それ1年間かけて覚えるの。頭の中にたたき込むの。それが1年かかるの」

と笑顔で話し、時間をかけて根気強く練習していることや、もっとたくさんの曲を弾けるようになりたいという思いが伝わってきた。

- ⑤これからやってみたい活動：音楽やピアノが好きで「とびたつ会でも続けていきたい」と語った。

【考察】

Qさんはもともと「見る側」だった「わかそよ」に自分も参加したいという主体的な思いから、青年学級への参加を決めている。コンサートの実行委員会を務めるとびたつ会にも参加し始め、今は創り上げる立場として積極的にかかわっている。Qさんの話しからは、本人の「やりたい」というニーズから活動が広がっていく青年学級の可能性が伺える。

3. 19 Rさん

26歳男性。B市の障害者青年学級に参加。現在は家族と同居。日中は地域の作業所で働いている。作業所では週に一度クラブ活動があり、エアロビクスや音楽などを楽しんでいる。

- ①学級歴：2006年6月から、作業所の友達と一緒にいったそうである。
- ②青年学級参加のきっかけ：「サマーキャンプがあるのを知って」と話した。
- ③青年学級の思い出：「修学旅行」が思い出に残っている。Rさんは毎年「レク係」をやっており、修学旅行の時の「バスレクが楽しい」「レク係は修学旅行以外でも踊りなどの活動をする」そうである。
- ④青年学級の仲間と職場の仲間との違い：職場の仲間もたくさん青年学級に来ていて、「いつも作業所の仲間たちと一緒に」と言う。
- ⑤友達への思い：青年学級でとくに仲が良いという友達の名前を6名ほど挙げていた。同じ職場の仲間や職場が違って一緒にクラブ活動をしている人もいると言う。
- ⑥これからやってみたい活動：「いつも修学旅行の時にレク」をやっており、「またやりたい」と話した。「レク係ではゲームとか、キックベースとか、椅子取りゲームとかが楽しい」と言う。「去年はバスの1号車と2号車のバス乗り場で」レクをやり、うまくいったと笑顔であった。今年の係はまだ決まっていなかったが「次もレク係に立候補する」と話した。
- ⑦生活や仕事へのつながり：「僕は今年頑張ることは、友達に迷惑かけないように、楽しく青年学級を続けて、たくさん協力していこうかな」と語った。

【考察】

Rさんは毎回の学級日にとても早く公民館に来ており、青年学級を楽しみにしている。またRさんは「レク係」にやりがいを感じており、「次もレク係に立候補する」という言葉から、自分のやりたいという思いのもとに積極的に活動していることが伺えた。

3. 20 Sさん

38歳男性。A市の障害者青年学級に参加。日中は地域の作業所で働いている。

- ①学級歴：今年で15年目。
- ②青年学級の思い出：青年学級に入ったばかりの頃、Sさんの入っていた健康体作りコースは成果発表会で「組体操」をやったそうである。「ピラミッドとかやりました」と思い出を語っていた。「太り気味なのでたまにはスポーツをやらなくちゃいけないなと思いました。そう思って健康体づくりコースに入りました」と言うSさんは、食事にも気を遣っている。「バランスはよくとれてるんで。魚とかお肉とか食べています。ヘルシーなダイエット」と話していた。今年度は体を動かそうと思って冒険散歩コースに入ったそうである。青年学級では「合宿とか、日帰りバスハイクとか」が楽しいと言う。合宿の場所の希望としては「愛川村に行きたい」そうである。今年度、コース内で来年の合宿について話し合い、その時、仲間から「愛川村」という提案が出たのだと話した。
- ③参加による変化や成長：Sさんは今年初めてコースの「班長」を務めている。支援者に推薦され、やってみようとして立候補したそうである。今年度、コース活動で多摩川を散歩した話もしていた。以前は「新聞委員」として新聞やしおりに作っていたそうである。
- ④これからやってみたい活動：「キラキラ夢新聞を作りたい」とはっきり希望を述べた。以前、新聞委員会に

入って、同じ名前の新聞を作っていたと言う。「新人担当者の希望」「コースの内容」「イラスト」などを書いていたそうである。もともと「絵を描くことや字を書くことは得意」で「新聞委員会が合った。好きだった」と話しており、思いは強いようであった。

- ⑤生活や仕事へのつながり：「職場でリトミックやってた」そうで、青年学級の体を動かす運動が職場の運動とつながっていたと言う。「青年学級に来ると、次の日仕事頑張ろうとか、そういう元気が出たりしますか」と尋ねると、「やる気が出てきました」と強く答えた。

【考察】

もともと職場でリトミックをやっていたというSさんは、青年学級の「健康体づくりコース」「ダンスアンドミュージックコース」で体を動かしたり、音楽を楽しんだりして活動を深めていった。自分の好きなことと青年学級の活動がうまくつながって、より充実したものとなっている。また「キラキラ夢新聞を作りたい」という言葉からは、得意なことを活かすことに自分の役割を見いだしていることがわかる。

3. 21 Tさん

34歳男性。現在はとびたつ会に参加しているが、過去にはA市障害者青年学級に参加経験もある。家族と同居。日中は地域の作業所で働いている。転勤を経験しており、今の職場は3カ所目。

- ①学級歴：約3年間A市の青年学級に参加した後、北海道に転勤のため8年間休む。その後A市に戻ったが、青年学級は新生の募集を停止していたためとびたつ会に参加。とびたつ会の学級歴約5年。
- ②青年学級参加のきっかけ：「高校卒業して、なんか日曜日暇だな、何かないかなと思って公民館行ったら、いいよって言われたから」ということで青年学級に参加したそうである。
- ③青年学級の思い出：「俺が北海道行くとって言ったときは、うちらみたいな利用者から北海道行くとって決まったときは、すごい目で『ええ!?!』って。で仲間から、みんなで記念写真撮ろうやって」と北海道に転勤が決まったときの仲間の反応やかかわりについて笑顔で語った。「その時に撮った写真がまだ残ってる」ととても嬉しそうであった。「北海道行って、夏と冬しか帰れなくて、じゃあ公民館でも行ってみるかって公民館行って。そしたら〇〇さん(支援者)から『よく来たね』って」と、北海道に行っている間もA市に帰省したときには学級に顔を出していた。
- ④参加による変化や成長：「日曜日が暇だと言った入ったそうですが、日曜日が楽しくなりましたか」と尋ねたところ「はい」と答え、さらに「日曜日が楽しいと、次の日から頑張れるということがありますか」と尋ねると「ある」とのことだった。

【考察】

「なんか日曜日暇だな」と公民館に行ったり、転勤から戻って青年学級に飛び入り参加したりとTさんは行動的である。明るく積極的なTさんには、多くの支援者からサポートもあった。「やりたい」という思いを受け止め、協力してくれる人がTさんの周りにはたくさんいたことが伺える。

3. 22 Uさん

33歳男性。A市の障害者青年学級に参加。現在は家族と同居。日中は地域の作業所で働いている。

- ①学級歴：今年で8年目。
- ②青年学級参加のきっかけ：Uさんの作業所の職員であり、A市の青年学級支援者でもある方に誘われ、「入ってみようかなと思って」参加し始めたと言う。「その時から青年学級ではわかそよの練習やってたりして、音楽が好きだからそういうのも聞いていいな」と思ったそうである。Uさんは当時から「わかそよにずっと参加して」いる。Uさんは一時期、発展学級である「とびたつ会」にも参加していた。とびたつ会について「とびたつ会と青年学級は似てるけど、ちょっと違う感じ」「とびたつ会に行くとなんか難しい問題があってやめちゃった。青年学級の方が楽しい」「青年学級の方が班長をやったり積極的にやってた」と話した。
- ③青年学級の思い出：ギターを教えてくれた支援者に「音楽は心臓だから、生きてるから、続けた方が良くて、やめたらあかんよって言われた」と支援者との思い出を語った。
- ④参加による変化や成長：Uさんは長くコースの班長を務めている。「班長会といえば成果発表会のこととかいっぱいやっている。大変だけど楽しい」と語っており、自分たちで行事や学級全体のことを決められるこ

とにやりがいを感じているようである。また班長会で決まったことを自主的に「青年学級のお知らせとかをパソコンで作ってる」と言う。毎回それを公民館にFAXで送り、学級ニュースにのせている。

- ⑤青年学級の仲間と職場の仲間との違い：「職場とはちょっと違う。青年学級に入ると雰囲気が変わっちゃう」と言うように、青年学級の方が和気あいあいとした雰囲気があるそうである。また「青年学級に入って友達が増えた」と話した。
- ⑥これからやってみたい活動：「あります。班長を続けて頑張りたい」と力強く答えた。Uさんは班長会の魅力を感じているようであった。「パソコンもやりたいなど思っている。班長会に出ると決まったことがわかるから、それをパソコンで打ってお知らせとか作れる。パンフレットも作りたい。しおりとか」との意気込みも聞かれた。
- ⑦生活や仕事へのつながり：「例えば青年学級で楽しい活動をして、次の日の仕事を頑張れるなどありますか。」と尋ねると「あります」と即答した。そしてUさんたちが学級活動の中で作った「僕たちの仕事」という曲には「明日のやる気が湧いてくる」という歌詞があるのだと語った。「仕事ができるって頑張れる気がする」とUさんは話した。

【考察】

青年学級はUさんが十分に力を発揮し、楽しめる場である。「班長会に出ると決まったことがわかるから、それをパソコンで打ってお知らせとか作れる」というように、学んだことや得意なことを活かす場としても青年学級の意義は大きい。またギターを教えてくれた支援者との出会いは、Uさんの人生に大きな変化を与えた。その支援者はもう青年学級をやめてしまったが、Uさんは今でも学級日にはギターを持ちこみ、歌の伴奏をしている。Uさんのエピソードは青年学級での出会いが参加者の世界を広げる可能性をもっていることを示している。

3. 23 Vさん

38歳女性。A市の障害者青年学級に参加。現在は家族と同居。普段は地域の作業所で働いている。

- ①学級歴：約10年。青年学級参加のきっかけ：Vさんの作業所の職員であり、A市の青年学級支援者でもある方に「わかそよのコンサート出てみないか」と誘われ、「そっから入りたくなって気持ちになりました」と話していた。実際にわかそよに出てみて「青年学級のこと、もっと深くいろんなこと知りたいなって気持ち」になったそうである。
- ②青年学級の思い出：長く生活コースで活動しているVさんにその理由を尋ねると、「他の所へ移動とかしますと、また新たに人見知りとかが出てしまうからっていう怖さとかもありまして、なかなかそこから移動することができないかなっていう感じもあります」と語った。生活コースを選んだ理由は「グループホームとかなに行くのが多いかなと思って、将来自分のためになることならやってみたくていう気持ち」があったそうである。生活コースではよく自立に関する学習をしていたそうで、グループホームについても事前に学習や打ち合わせをしてから実際に訪問するなどの活動をしていたと言う。
- ③参加による変化や成長：「友達が増えたのもそうなんですけど、スタッフさんとかも自分を気にかけてくれるようになりました」と話し、青年学級に入ってVさんの人間関係が広がったことが伺えた。「人間関係がちょっと苦手な部分というの、自分にはすごくあったんですね。でもそういう気持ちも全部、怖がらなくて大丈夫という気持ちを取りながらの付き合い方をしてくださっています」と話した。
- ④青年学級の仲間と職場の仲間との違い：職場は仕事をする場所であり、職場の仲間は一緒に仕事をする仲間という思いが強いと話していた。それに対して「青年学級は自分がリラックスできる場所としていたかった」と言う。しかし多くの友達とのかかわりの中で、今は「青年学級でも、リラックスできないような時がやっぱり多くて」とも話した。
- ⑤友達への思い：最近調子が良くない友達に対して「私が見る限りでは、一人で頑張ってどうするんだろうなあみたいな気持ちが強い。見てて思うんですね、こだけ人がいるのに何で一人で走り回って頑張ってるんだろう。もうちょっとリラックスしても良いんじゃないかな」という思いを語っていた。その友達はVさんの養護学校時代の先輩でもあり、「あんまり頼っちゃいけないのかなって思いながらも、頼ってしまう自分がいるところでは申し訳ないと思います」とも話していた。

- ⑥これからやってみたい活動：Vさんは「歌うこととか好き」で、以前にあった音楽コースがVさんが学級に参加したいと思うきっかけになったと言う。しかし現在、「きっかけのものがなくなってしまって、声を出すところがなくなってしまって、ちょっと悲しいなあって思ってます。もっと声を出して、歌を歌ったりする活動が増えてくれたら良いかなあって」と語った。今年度のコース活動でも他の学級と合同で歌作りをしようという話が出たそうだが、いつもの活動と違う場所、違うメンバーで緊張してしまい、うまくいかなかったそうである。
- ⑦生活や仕事へのつながり：Vさんが入っている生活コースではよく調理活動も行っている。家庭では「今、母がいなくなったらあんたがやるんだからよく見ときなさいってということで、結構お勝手に立つことがあります」と話した。生活に関しては「もっと自分が覚えたいところが、母がいなくなったときに、銀行に行ってお金を入れるとか、そういうことを身につけたいなあって思う」と言う。「母が亡くなったときに、自分はどうやっていけばいいかっていうことがいっぱい増えてくるだろうし、兄に相談できるかといったら、自分のことだからできないだろうなって」「お兄ちゃんにお嫁さんができればもっと難しくて、お姉ちゃんやって、お兄ちゃんやってなんて頼みにくだらうなって」と、将来への不安とそれを解消するために学びたいことがあると語った。せっかく生活コースに入っているので、もっと自分たちの生活にかかわることを勉強したいと話していた。青年学級を続けていく中で「やめていきたくなるときもある」。しかし「いざやめますって言ったときに、じゃあやめたときにどこに私は行けるんだらうって考える」。発展学級であるとびたつ会にも興味はあるようだが、新たな関係作りへの不安もあり、まだ「一歩出る勇氣」は出ないそうである。「なんか一つひとつ片付けていくのは大変。でもって持っているのも大変。それが成長なのかもしれないけど」という言葉が印象的であった。

【考察】

A市の青年学級には「卒業」制度がなく、人数の増加が問題となっている。青年学級に参加してから少しずつ人見知りが克服されてきたというVさんのエピソードからは「卒業」制度がないことの意義が伺える。青年学級で出会う仲間は、生涯にわたって付き合うことのできる仲間である。その中でゆっくりと関係を築いていけるという良さがある。またVさんは将来の生活について真剣に考えており、そのために青年学級で学ぼうとしている。参加者の要求にもとづき、それに応じた活動を行う青年学級の役割は大きい。

3. 24 Wさん

59歳男性。A市の障害者青年学級を経て、現在は発展学級であるとびたつ会に参加している。兄嫁と同居。一般就労の経験もあるが、現在は地域の作業所で働いている。

- ①学級歴：青年学級を約27年、とびたつ会を約5年、合わせて32年続けている。
- ②青年学級参加のきっかけ：とびたつ会に移った理由は「青年学級も長くいるし、どうもだめだなーと思って、ずーっと同じ所で」と語った。Wさんは外に出ることが好きで、青年学級では「ずっと外に出てたかな」と言う。逆に「とびたつ会は中にいてずっと話し合い」だそうだが、Wさんは会長を務めるなど積極的に関わっている。
- ③青年学級の思い出：「とびたつ会では、みんなで全国から集まった大会のときに泊まりがけで行く」と言う。全国障害者問題研究会全国大会や社会教育研究全国集会、ピープルファースト等に参加しているそうである。とびたつ会では活動内容を自分たちで話し合っ決めていく。そのため「次は何をやるかっていうことが楽しい。自分たちで大体を決めている。だからわくわくする」と話していた。

【考察】

「次は何をやるかっていうことが楽しい。自分たちで大体を決めている。だからわくわくする」という言葉からは、とびたつ会の活動が完全に本人・当事者主体で進められていること、そしてそのことを本人も実感していることがわかる。この「自分たちでやっている」という意識が高いほど、活動の充実感や達成感は大きい。Wさんはとびたつ会で会長を務めたこともあるが、こうした活躍の背景には、長年の青年学級の活動経験があると考えられる。青年学級からとびたつ会というステップを踏むことで、より確実に、力をつけていくことができているのではないかと推察できる。

4. 障害者青年学級の意義・役割に関する考察

本調査の結果から、障害者青年学級の意義・役割の一つとして「人間関係の充実」が示唆された。これは参加者の青年学級に対する主体的な関わりによるものである。そこで以下では、障害者青年学級の意義・役割のうち人間関係の側面に着目して考察を行う。考察に当たっては、A市障害者青年学級の「学級ソング」も用いた。

4. 1 青年学級参加による人間関係の充実

青年学級の参加者たちは、出会いや友達を強く求めている。A市の作業所で働くEさんは、青年学級への参加理由を「友達がない、話す相手がないから」と語った。B市の作業所で働くHさんも「友達を作りたい」という思いもあって青年学級に参加したのだと話していた。「友達ともっといろんな話しがしたい。友達をもっとたくさんつくりたい。(中略)友達ともっといろんな所へ行きたい。友達をもっとたくさんつくりたい」(ともだちのうた)という学級ソングの歌詞からも、参加者たちが友達を求める切実な思いが読み取れる。

知的障害をもつ人の多くは、特別支援学校高等部を卒業後すぐに就労する。職場と家庭との往復で、出会いの機会は少ない。そのため職場に入ってから人間関係が広がらずに悩む人が多くいる。グループホームで暮らすCさんは、筆者が調査のためにグループホームを訪ねてから、顔を合わせるたびに「このあいだは良かったね。また遊びに来てよ。待ってるから」と声をかけてくれる。家に友達が遊びに来る機会が少なく、調査での訪問が嬉しかったということが伝わってきた。

青年学級は参加者たちに「友達を作る」という人間関係の量的な広がりやを保障している。今回調査をさせていただいた方の中には青年学級の楽しみは「友達を作ること」と語った人、実際に青年学級に入って「友達が増えた」と話した人も多くいた。友達を求めて青年学級に参加したEさんも「職場では話す人がいないけれど、青年学級では学級生やスタッフと話ができることが嬉しい」と青年学級での人間関係に満足していた。

人間関係の量的な広がりやのニーズは、学級歴が長い高齢の人よりも学級歴が短く若い人の方が強い。全体的に若い人ほど青年学級以外の余暇が充実しており、休日は家族で出かけるという人や作業所などでクラブ活動を楽しんでいるという人が多かった。彼らは青年学級にも他の活動と同じように「楽しさ」や「友達作り」を求める傾向にある。この背景には、青年学級以外に様々な活動の選択肢があることなどが考えられる。

山崎(2001)は和歌山市の障害者青年学級「すばらしき仲間たち」の参加者を対象に、生活調査を行っている。この調査では「青年学級のどのようなところが楽しいか」という質問項目において「みんなと話し合えること」「仲間に出会えること」という回答がそれぞれ1位、2位となっており、他の青年学級でも仲間とのつながりに楽しさを感じている人が多かった。

人間関係の量的な広がりや、大学公開講座でも得ることができる。東京学芸大学公開講座で平井(2006)が行った調査では、講座の受講によって受講生に「実際の広がり」がもたらされることが明らかになっている。ただし公開講座は受講生が興味のある学習内容を選んで参加するため、自分とは異なる興味・関心をもつ人には出会いにくい。そこででの出会いはあくまできっかけであり、継続的にかかわっていくかどうかはわからない。

それに対し青年学級は生涯にわたる居場所であり、そこに集うのは人生を共に歩む仲間である。一般就労をしているKさんは「仕事で大けがをして入院した時に、スタッフがお見舞いに来てくれた」ことが今でも思い出に残っているし、活動が終わった時間に公民館にかけたことがあるというLさんは「会いたかったもんですから、先生や友達に」と話している。「これからも青年学級を続けていきたい」と話した人も多かった。

青年学級で仲間と共に活動をしたり話し合いをしたりする中で、対人関係スキルの向上が伺えるが、これは人間関係の質的な深まりと言える。B市の青年学級に参加して約5年のBさんは、青年学級に参加するようになってから周囲への配慮や気遣いができるようになった。「お休みの人のことも、みんなもう少し受け止めてほしい」「足下が危ないから、手を引っ張ってあげたりゆっくり歩いてあげたり、気をつけてあげたい」と語っている。人見知りがあって人間関係が苦手だったとVさんは「人間関係がちょっと苦手な部分というのも、自分にはすごくあったんですね。でもそういう気持ちも全部、怖がらなくて大丈夫という気持ちをとりながらの付き合い方をしてくださっています」と話しており、だんだんと学級の仲間に心を開いていることが伺

える。またとびたつ会に参加しているPさんは「もう、伝えるってことがどれだけ大変かというのを僕は知ってきた」「機会がなかったのと、それから自分の考えが出てこなかった」ために自分の思いをはっきりと伝えることができなかつたが、青年学級ととびたつ会の活動を通して伝える力がついてきたと言う。

大学公開講座における平井(2006)の調査では、「コミュニケーション態度の向上」については受講回数による比較で参加回数が多い人の変化が大きく、また公開講座の受講生と受講していない人との比較でも受講生の変化が大きいたことが明らかになっている。また柴田(1993)は、町田市障害者青年学級において、①自治的な集団、②文化的創造活動、③生活という主題という三つの実践の柱にそった活動によって「一人一人の学級生の人格的な広がりや深まり」が認められると指摘している。障害者青年学級では「人格的な広がりや深まり」によって対人関係スキルの基礎となる力が育まれており、それによって人間関係の質的な深まりが認められていると考えられる。

4. 2 人間関係の充実による生活の向上

①余暇生活

障害者青年学級が直接大きくかかわっているのは余暇生活である。青年学級の活動は、家庭でも仕事でもない時間に自主的に参加する余暇活動であると言える。今回の調査では、足が悪く普段はあまり遠出をしないと言うCさんが、青年学級での外出活動をととても楽しみにしていた。また家では外出をしたり体を動かしたりすることが「全然ない」というEさんは、健康を気にして青年学級ではスポーツコースに入り、体を動かしている。

東京都福祉保健局(2009)が知的障害者本人または保護者に対して行った調査では、「障害のためにあきらめたり妥協したこと」として、「就職」「結婚」に次いで「旅行や遠くへの外出」が上位となっている。障害者青年学級は普段の生活で行うことが難しい活動を保障し、参加者の余暇生活を豊かにしていることがわかった。

②生活スキル

家族との関係をはじめ衣食住や身だしなみなど、生きていく上で必要不可欠な生活スキルについてであるが、今回の調査では青年学級の思い出として「修学旅行」「合宿」「春の旅行」などの宿泊行事について語る人が多くいた。宿泊行事では家族と離れて仲間と寝起きを共にし、身の回りのことも自分たちで行うことになる。A市障害者青年学級の合宿では、食事も自分たちで作ることが多い。宿泊行事の直接的な目的は仲間と一日中生活を共にし、普段できない活動や体験をすることであるのだが、参加を重ねることによって生活スキルの向上が認められるであろう。

③生活のリフレッシュ

仲間とともに青年学級で楽しく活動をすることで明るく前向きな気持ちになる。仲間と思いを語り合い、共有することで気持ちが軽くなる。休日の学級活動がアクセントとなり、翌日からの仕事や生活へのモチベーションがあがる。作業所で働くFさんは「お仕事で頑張って、青年学級に入ってきたんですよ」と話し、作業所で働くPさんは「次の日から仕事を頑張ろうという気持ちになりますね。すごく力になりますね」と力強く語っていた。

青年学級で長く音楽コースに入っているUさんは「僕たちの仕事」という学級ソングの歌詞を出し、「仕事ができるって頑張れる気がする」と語った。Uさんが教えてくれた学級ソングには「君の仕事の大変さ、あなたの仕事の難しさ、分かり合えて良かったね。明日のやる気が湧いてくる」(僕たちの仕事)という歌詞がある。A市の作業所で働くPさんが「職場だけだとちょっと頭が切り替わらなくて、限界がどこかにあるんでしょうね」と言うように、職場とは違う青年学級での人間関係がリフレッシュにつながっていることが伺える。

他の青年学級でもこの点は指摘されている。高畑(2004)はT市「みんなの青年の会」において調査を行い、「学級生のフラストレーション解消の場として本会が機能している」ことを指摘した。加えて「仲間たちと集うことは普段の会社の人間関係を忘れ、楽しむことができる大切な機会となっている」と述べている。ま

山崎(2001)も「仲間たちにとって青年学級の具体的な意義」は「障害を持つ同じ仲間の中で、自らを解放し、仲間たちと『喜怒哀楽』を共有できる場」ということであり、「お互いの良さも弱さも認め合い、『また明日からがんばろう!』とリフレッシュできる機能をもっている」と述べている。

④地域で共に生きていく仲間

田中ら(2004)が社会就労センター(授産施設)を利用する身体・知的・精神障害者を対象に行った調査によると、入所施設利用の知的障害者の63.3%が授産施設を出てまちで暮らしたいという希望をもっていた。また将来の暮らしの希望について通所施設利用の知的障害者は、「親と」32.8%、「グループホームで」20.5%、「兄弟姉妹と」14.0%、「施設で」10.8%となっている。

青年学級の参加者も地域で暮らしたいという思いは強い。親亡き後の不安も大きい。将来家族と離れて暮らすことになったとき、一人だけで生きていくことは難しい。そうした中で同じ地域の青年学級に多くの仲間がいるということは大きい。将来は「一人の生活」がしたいと考えているFさんは、青年学級は「みんなと友達や先生、職員たちがいるし、話を聞くことができる」ので「一人になっても活動をしたい」と述べていた。青年学級で長く生活コースに入っているVさんは、母親がいなくなったときのことを考え、少しずつ将来の生活の準備をしている。「母が、いなくなったらあなたがやるんだからよく見ときなさいってということで、結構勝手に立つことがあります」と話した。また将来、暮らしやお金のことを相談できる人はいるのだろうか心配し、青年学級の生活コースで自立やグループホームのことを勉強している。学級ソングの「大切なお姉さんがなくなりました。私は二階で泣きました。一人になるのが少し心配。なんとかなるさ仲間がいれば。大丈夫、いつか気の合う仲間とグループホームで暮らしたい」(私の想い)という歌詞からも、同じような本人・当事者の思いや青年学級の必要性が伺える。

当然ながら、本人には「友達」だけでなく「恋愛」「結婚」の希望もある。それは学級ソングの歌詞からも伺える。「望みは好きな人と一緒に暮らすことです」(オリジナルスマイル)、「いつか花束母さんにあげて、優しいお嫁さんになれたらいいな。素敵なおドレスを着て」(ほくたちの夢)、「好きな人と二人で暮らすのも僕の夢。どうしたら好きと言えるかな、結婚できるかな。二人で働くのもきっと楽しいな」(夢にのせて)などがそうである。こうした希望が青年学級でどのように満たされているかは今回の調査で確認できなかったが、同じような困難を抱える仲間が集い、互いに思いを語り合うこと、共有することには意義がある。

4. 3 本人活動としての障害者青年学級

本人・参加者の「やりたい」という思いを活動につなげるためには、本人・参加者の声に耳を傾けなければならない。そして本人・参加者が自由に思いを表現できる場であればならない。

今回調査を行ったA市では、言葉によるコミュニケーションが難しい人もパソコンを使って思いを表現できるようにしている。ただ「やりたいこと」ではなく、今の一人一人の思いを聞き合おうとする雰囲気ができている。またそこで語られた思いを歌詞にして歌うことで、より多くの人と共有できるようになった。

B市では本人・参加者の意見をもとに活動内容が計画されている。A市と比べると「話し合い」という形の活動は少ないが、一人ひとりの伝えたいことを受け止める雰囲気がある。参加者には伝えたい多くの思いがあることが、今回の調査では明らかになった。Eさんにはあふれ出すほどに青年学級でやりたい活動があり、また職場でも青年学級でも自分の言動に気をつけようとしていたFさんは「もっと職員と話がしたい」という思いを語っている。

これからの障害者青年学級は、参加者たちのこうした思いを、どれだけ尊重し活動にいかしていくことができるかが重要である。スタッフ主導のレクリエーションでは青年たちには物足りない。「自分たちがやりたいことを自分たちでやる」ことが大切である。その点で、組織運営も本人・当事者が進めているとびたつ会は、これからの青年学級が発展していく方向を示しているだろう。

5. おわりに

本研究では、生涯学習時代における障害者青年学級の意義・役割について、本人・当事者への障害者青年学

級に関するニーズ調査を通して明らかにしてきた。

その結果、障害者青年学級の意義・役割のひとつとして、人間関係の充実」が示唆された。「人間関係の充実」には友達の数が増えるという「量的な広がり」と、対人関係スキルの向上という「質的な深まり」が見られた。青年学級は参加者の生涯にわたる居場所であり、そこで出会うのは人生を共に歩む仲間である。

青年学級で人間関係が充実することにより、生活面にも良い影響があった。例えば余暇生活に関しては普段の生活で行うことが難しい活動を楽しめること、家庭生活に関しては宿泊行事等で日常生活スキルが向上すること、職業生活に関しては気持ちをリフレッシュして仕事に前向きに取り組めること、将来の生活に関しては同じ地域で共に生きていく仲間がいることなどである。

障害者青年学級は本人・参加者の「やりたい」というニーズにもとづいて活動を展開しており、本人活動としての意義も大きい。今回の調査では本人・参加者がさらに多くのニーズを有していることが推察され、今後はそうしたニーズを丁寧明らかにしながら青年学級の活動を展開していくことが求められる。

なお今回の調査では、質問内容がわかりにくく、対象者が答えに窮してしまうことがあった。質問方法などを工夫し、対象者への負担を軽減する必要がある。加えて今回の調査対象者は言語によるコミュニケーション能力が比較的高い人に限られている。障害者青年学級には多様な障害種・障害程度の人に参加しており、A市の学級にはパソコンを使って気持ちを表現する人もいた。今後は調査方法を工夫し、多様な人に聞き取りを行っていく必要がある。

文 献

- 平井威 (2006) 知的障害者の生涯学習支援, 『発達障害研究』 第28巻3号, pp.202-207。
- 今枝史雄・菅野敦 (2010) 知的障害者の成人期における生涯学習支援について—生涯学習に関する研究の動向と実態の調査から—, 『東京学芸大学紀要・総合教育科学系Ⅱ』 第61集, pp.121-134。
- 小林和子 (2002) 「すみだ教室」の取り組み, 『教育と医学』 第50巻12号, pp.32-38。
- 松田泰幸 (2008) 青年学級から「とびたつ会」へ—五年目を迎えて—, 『月刊社会教育』 第636号, pp.46-51。
- 社会教育推進全国協議会 (1999) 『第39回社会教育研究全国集会報告集1999』, pp.46-50。
- 社会教育推進全国協議会 (2000) 『第40回社会教育研究全国集会・報告書』, pp.32-33。
- 社会教育推進全国協議会 (2002) 『第41回社会教育研究全国集会・報告書』, p.42。
- 社会教育推進全国協議会 (2002) 『第42回社会教育研究全国集会・報告書』, pp.39-40。
- 社会教育推進全国協議会 (2004) 『第44回社会教育研究全国集会 (社全協40周年記念集会)・報告書』, pp.50-52。
- 社会教育推進全国協議会 (2005) 『第45回社会教育全国集会 (福岡集会)・報告書』, pp.42-43。
- 社会教育推進全国協議会 (2006) 『第46回社会教育全国集会報告書』, pp.46-47。
- 社会教育推進全国協議会 (2008) 『第48回社会教育研究全国集会北海道集会報告書』, p.50。
- 社会教育推進全国協議会 (2009) 『第49回社会教育研究全国集会 (信州・飯田下伊那集会) 報告書』, pp.42-43。
- 社会教育推進全国協議会 (2010) 『第50回社会教育研究全国集会報告書』, pp.14-17。
- 柴田保之 (1993) 障害者の社会教育に関する実践的考察, 『國學院雑誌』 第94巻1号, pp.1-13。
- 柴田保之 (2004) 障害者青年学級での自己変革と自立生活, 『月刊社会教育』 第587号, pp.11-16。
- 高畑庄蔵 (2004) 知的障害者本人参加を重視した青年学級のより豊かな実践を求めて—T市「みんなの青年の会」における13年間の活動内容の検討—, 『発達障害支援システム学研究』 第3巻2号, pp.55-64。
- 田中敦士・朝日雅也・星野泰啓・鈴木清覚 (2004) 福祉的就労障害者における雇用への移行と自立生活に向けた意識: 身体・知的・精神障害者本人2543名に対する全国調査から, 『琉球大学教育学部障害児教育実践センター紀要』 第6号, pp.27-40。
- 津田英二・大石洋子 (2004) 障害者の学びと表現活動, 『現代的人権と社会教育の価値』 東洋出版, pp.292-309。
- 東京都福祉保健局 (2009) 障害者の生活実態, 『平成20年度東京都福祉保健基礎調査報告書』, pp.95-148。
- とびたつ会 (2010) 『とびたつ会活動報告集』 第2号。
- 山崎由可里 (2001) 地域・家庭・仲間たちをつなぐ結節点としての青年学級「すばらしき仲間たち」—生活調査をもとにして—, 『障害者問題研究』 第29巻1号, pp.24-32。

生涯学習時代における障害者青年学級の役割

—— 障害者青年学級参加の本人のニーズ調査から ——

Functions of Learning Activities for the Youth with Intellectual Disabilities in the Days of Life-Long Learning

—— from Needs Survey of the Participants of the Activities ——

寄 林 結*・高 橋 智**

Yui YORIBAYASHI and Satoru TAKAHASHI

特別支援科学講座***

Abstract

This paper was aimed at clarifying the meanings and functions of the learning activities for the youth with intellectual disabilities from views of the participants. Subjects were participants in the activities of the city A and the city B, and the “Tobitakukai”, developmental activities of the city A. The survey duration was November 2010-january 2011. Obtained answers were 23.

This research survey suggested that one of the meanings and functions of the activities was making human relations full. Also, because of that, there were positive influences on life of the participants. This research declared that participants of the activities had various feelings and needs for the activities. We will have to reveal carefully the various needs of the youth with intellectual disabilities.

Key words: Learning Activities for the Youth with Disabilities, the Youth with Intellectual Disabilities, Life-Long Learning, Needs Survey of the Participants

Department of Special Needs Education, Tokyo Gakugei University, 4-1-1 Nukuikita-machi, Koganei-shi, Tokyo 184-8501, Japan

要旨: 本研究の目的は、障害者青年学級に参加している本人・当事者の視点から障害者青年学級の意義と役割を検討することである。調査対象は、東京都内A市およびB市の障害者青年学級に参加している本人・当事者と、A市障害者青年学級の発展学級である「とびたつ会」に参加している本人・当事者である。調査期間は2010年11月～2011年1月。23人の本人・当事者から回答を得た。本調査の結果から障害者青年学級の意義・役割の一つとして「人間関係の充実」が示唆され、そのことによって生活面にも良い影響が現れていることが伺えた。本調査では、障害者青年学級に参加している本人・当事者が様々な活動のニーズをもっていることが明らかになった。今後はそうしたニーズを丁寧に明らかにしながら青年学級の活動を展開していくことが求められる。

キーワード: 障害者青年学級, 知的障害者, 生涯学習, 本人のニーズ調査

* Teacher, Tokyo Metropolitan Machida City No.4 Primary School

** Ph. D., Professor of Department of Special Needs Education, School of Education, National University Corporation Tokyo Gakugei University

*** Department of Special Needs Education, National University Corporation Tokyo Gakugei University